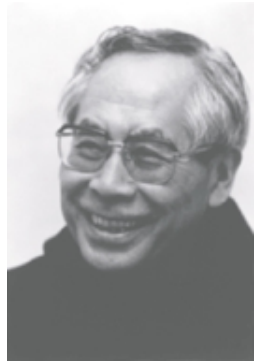
出会い（12）

修道生活きのうきょう

奥村　一郎



奥村　一郎 / おくむら・いちろう
1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

キリスト誕生以来、二千年の歴史の終末を前にして、新しい世紀が始まろうとしている。本稿が読者の皆様の目に触れるときは、すでに、新世紀の暁を迎えていることであろう。時そのものは、今も、いつも、光より速い瞬発速度で無限の永遠をめざして一直線上に飛び去っていくのであろうが、人間は、個人にしても、集団にしても、紆余曲折の道を辿りながら進む。「十年一昔」といわれる人生は、十年を節目にして、右へ左へと、ジッグザッグしながら過ぎていく。束の間の命とはいえ、そこには、歴史がある。ということは、伝統があり、また、創造があるということである。昨日があって今日があり、今日があって明日がくるということである。今日まで育ってきたカトリックの修道会も、絶え間ない新陳代謝によってそれなりに成長してきた。もう短いとはいえない、私の人生の大半はその修道の日々であった。それも、カルメル山という聖地イスラエルの北部に位置する旧約時代から知られた山を発祥の地とする古い修道会であり、その名に因んでカルメル会といわれる。正確な意味で創立者をもたない、いわば、自然発生の修道会で、祈りを基本とする東方的キリスト教の霊性を特色とする。その会に私が入ろうとした五十年近く前の日本には、男子カルメル会がなかったため、まず、フランスの修道院にいくことになったことはすでに述べた。まず、志願期を南仏の町タラスコン、次に修練期は、ブドウ酒で知られたボルドー近郊ピレネー山脈の麓の寒村ブルッセイ、それから、中仏の大都市リヨンのカトリック大学でのスコラ哲学研修まで約五年、その後、フランスを出国、初めてイタリアに入り、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階まで五年、あわせて約十年の、ヨーロッパ留学を終えて日本に帰国することになった。

このようなフランスとイタリアでの生活は、私にとっては、すべてが二重に全く新しいものであった。文化の基本である言葉は勿論のこと、西欧的修道生活のなかで様々のカルチャーショックを体験していかねばならなかった。その幾つかを、本誌ですでに紹介してきたが、過ぎ去ってみれば懐かしくもあり、おかしくもある修道昔話の二、三をさらにつけそえてみよう。というのも、今の常識からすれば想像もつかないような修行がそこでは数多くあったからである。それらのことは、今後の修道の歴史にはもう二度と返り咲くことはない過去の遺産となってしまった。しかし、秋の枯れ葉が地に落ちて姿を消しながら、貴重な腐葉土となって木を育てていくように、未来に希望の花を開くための見えない糧となっていくことが待たれる。伝統なしの創造はありえないからである。

1．聖堂と食堂：

修道院といえば、礼拝の場である聖堂をまず考えるのが普通。聖書にも、「何を食べ、何を飲もうか…といって思い悩むな。何よりもまず、神を求めよ。そうすれば、これらのものは、皆与えられる」とイエスは教えられている。（マタイ6.31-33）

ところが、修道院に入って間もなく、「修道院の中で最も聖なる処は聖堂と食堂です。そこでは、いつも沈黙を守らなくてはいけません」と言われた院長の言葉が今も印象に残っている。事実、当時のカルメル会の生活規則では、一生肉食が禁じられ、毎年9月14日、キリストの十字架が発見されたことを記念する日から、翌年度の復活祭まで、いわゆる、「断食」が約半年にわたって続く。カトリック典礼用語では、前者を「永久小斎」、後者を「大斎」とよぶ。肉を常食とする欧米人にとっては、厳しい会則であったに違いない。

それだけではない。食事中にも、修道者たちは代わる代わる、様々な苦行をする。あるものは、急いで食べ終わって、食堂の真ん中に両腕をのばして十字架のキリストの姿をとる。もうひとりは、跪きながら、修道者たちの足に接吻する。私は、はじめ、彼が何をしているのか分からなかったので、上から中腰にたって彼をのぞこうとしたら、いきなり、私の足を爪でひっかかれた。「イタッ！」と、小声ながら叫んでしまったので皆からジロッと見つめられて赤面のいたり。また、ときには、院長自身が一人一人の前にきて、ていねいにお辞儀をし顔をだして、そのほっぺたを叩かれるという苦行があった。新米の志願者などは、手が震えて、なかなか、院長の顔を叩く勇気がでない。すると、院長が小声で、「叩け、早く！」とせき立てたりしていた。見ているだけでおかしくなる。新米のまた新米でありながら、私は、割に落ち着いて、ピシャリと一発院長殿に平手打ちを献上した遠い思い出がある。戦中軍隊で鍛えられたせいであったかも？ にしても、このように少々乱暴な、しかし、パンチの効いた往年の修練方法は今は全く修道院から姿を消してしまった。以前には、神の代理者とさえいわれて尊敬されていた院長時代であっただけに、一層意味があったにはちがいない。

2．髑髏（どくろ、されこうべ）：

もう一つ奇異な体験。入会の最初、はじめて食堂に案内されて、まず、ギョッとしたのは、正面の白壁に掛けられた大きな黒茶色の十字架とそれに掛けられた長い鞭、そして、その下にある院長席の食卓の上に置かれた、黒い髑髏を見たときだった。それも、模造品ではなく、本

物。しかも、昔この修道院にいて亡くなった修道者のものだそうで、案内の若い修道者はその頭を軽くなでながら見せてくれた。今もそのときの印象は鋭く胸に突き刺さったように残っている。修道生活は、確かに、「この世に死ぬ」という生き方を教える。弟子のひとりがイエスに「主よ、まず、父を葬りに行かせて下さい」と頼んだとき、イエスは言われた。「私に従いなさい。死者は死者に任せよ」（マタイ8.22）仏教の出家修行も変わらない。とくに「自分に死ぬ」という心構えはどの宗教的修行にも根本的なものである。禅寺では、凍てつくような寒い冬、墓地で座禅に夜を徹することもある。それにしても、食堂の真ん中に、亡くなった先輩の頭蓋骨をそのまま置くというのは解せない。カトリックの教会や、修道院には、多くの人に慕われた聖人の遺骸や遺骨がきれいに飾ったガラス箱などにいれてあるのは珍しくない。とくに、死人の復活を信じているキリスト者の場合は、ある意味で、自然でもある。それにしても、食堂に骸骨を置くことまでは頂けない。何だか、悪趣味にさえ思えた。今また、振り返れば、当時のカトリック神学やその霊性が十字架を過度に強調する処からきたひとつの結果であったとも考えられる。同じカルメル会であっても、今の修道院にはおそらくどこにもないことであろう。

他方、今は今で、人間は自分が生きることばかりに執着して、自然破壊、環境破壊、ついには集団的自己破壊にまで追い込まれてしまった。中庸の道はむずかしい。

付．女人禁制

カトリックの修道院、特に当時の観想修道会には、厳しい禁域制度があり、カルメル会もそのひとつ。男子修道院では、もちろん、女人禁制。そこで、食堂の中に置かれた髑髏の性別を鑑定せよ、ということになった。整形病院にもっていくか、それとも、歴史的調査をするか、喧々囂々。すると、ひとりの修道士がまかりでていった。「わたしにお任せください。鉄槌一発で答えをだしてみせます。カチンと思い切り叩いてもビクともしなければ、女の頭であることに間違いありません」。

写真展のご案内

P.G.I.（虎ノ門）

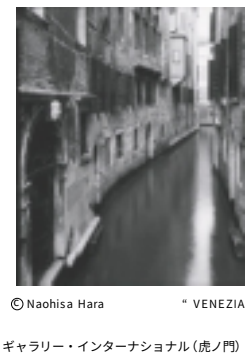
1月11日（火）— 2月10日（木）
P.G.I. 20 YEARS展

2月15日（火）— 3月31日（金）
原 直久　作品展「ヴェネチア」
Naohisa Hara “ VENEZIA ”

P.G.I. Shibaura（芝浦）

1月13日（木）— 2月25日（金）
鈴木理策　作品展「サスキア」
Risaku Suzuki “ SASKIA ”

3月3日（金）— 4月15日（土）
北山由起雄　作品展「流転」
Yukio Kitayama “ REALIZE ”



© Naohisa Hara　　“ VENEZIA ”

PHOTO GALLERY INTERNATIONAL

□ フォト・ギャラリー・インターナショナル（虎ノ門）
東京都港区虎ノ門 2-5-18　Tel. 03 3501 9123
月－金　11:00 －19:00　土･日･祝 休館
地下鉄銀座線虎ノ門駅下車　2番出口より徒歩5分

□ P.G.I. 芝 浦
東京都港区芝浦 4-12-32　Tel. 03 3455 7827
月－土　11:00 －18:00　第2･4土，日，祝 休館
JR田町駅芝浦出口（東口）より徒歩10分
ゆりかもめ 芝浦埠頭駅より徒歩15分

＊表紙の写真　クリス・スティール＝パーキンス作品 『London, 1990』

「この世に生まれ出た命。地球の新しい仲間たちです。しかし赤ちゃんを取り囲む地球の現実は、食料不足、経済問題、戦争、人種差別、そして遺伝子操作、出生前診断。今も毎日３万５千人もの赤ちゃんが栄養不足で命を落としている、という狭い地球。なかよく食べて、楽しく、生命力を発揮して、このきびしい時代に耐えて天寿をまっとうしてほしいと願うばかりです。」

〈Chris Steele–Perkins〉
1947年 ビルマに生まれ、49年にイギリスに移住。ヨーク大学で化学を専攻、ニューカッスル大学で心理学の学位を取得。71年 ロンドンに移りフリーランスの写真家となる。82年 マグナムの正会員。88年 ワールド・プレス・フォトよりオスカー・バルナック賞、同年イギリスの最も優秀なフォトジャーナリストに贈られるトム・ホプキンソン賞、89年 ロバート・キャパ賞受賞。95年より 98年までマグナムの会長を務めた。現在ロンドン在住。

クリス・スティール＝パーキンスは世界中を駆け巡りながら撮影を続けるフォトジャーナリストで、マグナムのメンバーです。スティール＝パーキンスが訪れ撮影した場所は限りなくありますが、紛争と平和、飢餓と富など、全く異なる社会情勢のなかでその両極端の世界を行き来する作者は、極めて冷静でありながら、ヒューマニティ溢れる眼でそこに生きる人々を写し取っています。